
図書館の人

R A N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

図書館の人

【Nコード】

N2450T

【作者名】

RAN

【あらすじ】

現代のような現代じゃないような、そんな不思議な図書館に訪ねてくる人も、不思議な人ばかりで。それぞれの思いを胸に、今日も本を探す人は来る。

サイト、dノベ転載

不滅の恋人 - 序 -

「あれ、フェイリア。お久しぶりですね」

本棚の整理をしていた図書館の司書シェイズは、かけている眼鏡を直して、フェイリアの姿を認め、声をかけた。

空中から煙のように突如現れ、ぼたん雪のようにふわりと降り立つウェーブの黒髪を持つ少女。

フェイリアは、頭を軽く下げて、シェイズに対して会釈をした。

「しばらく見なかったから、どうしたのかと思っていましたよ」

シェイズの言葉に、フェイリアはただ首をかしげるだけだった。

彼女はシェイズとも言葉を交わすことはできない。

シェイズはそれをわかっていたので、変わらず笑顔で、目の前にいるフェイリアの頭を優しく撫でた。

それ以上は何も聞かない。

彼女が突然この図書館に現れた日も、シェイズはただ笑顔でフェイリアを迎えた。

フェイリアには、それがとても心地よかった。

だから、彼女はよく図書館に来ていた。

そして、シェイズに顔を見せていた。

「とりあえず、貴女にまた会えてよかったです」

フェイリアは、シェイズの言葉に、笑顔を見せた。

あまり表情の動かない彼女が、珍しく見せる笑顔だ。

「そして、ちょうどよかったです。今、本の整理をしていたところだったのですよ。手伝ってもらえますか？」

フェイリアは、こくっとうなずいた。

そして、シェイズの指示をあおいだ。
フェイリアは、よくこうしてシェイズのお手伝いをするこもあ
った。

フェイリアは、彼女のいる場所である、時の狭間以外では言葉を
発することができない。

彼女が時の狭間に落ちた時に、そう決められたのだ。
だが、ちゃんと言葉を知っていたので、字を書くことができた。
だから、シェイズとどうしても話をしたい時は、筆談をしていた。
それでシェイズは、フェイリアが本が好きだということを知った。
本が好きな彼女には、センスがあった。
どの本がどこにあれば見やすいか、たまに相談することもあった。
たまに遊びに来ていたお客様だったフェイリアだったが、いつし
か図書館に必要な助手になっていた。

「ありがとうございます、フェイリア。とりあえず、これで全部で
す。また好きに本を見ていいですからね」

シェイズはそう言ったが、フェイリアは、何か物言いたげに彼を
見ている。

シェイズは、そのフェイリアの様子に、一瞬考え込む。

「少し、お話いたしましたでしょうか……？」

シェイズの問いにも、フェイリアは逡巡しているような仕草をし
て、うなずかない。

しばらく、膠着状態が続いた。
と、そこへ

「こんにちは。シェイズ」

少女の声がかげられた。

シェイズがそちらを見ると、肩までのさらさらとした金髪が印象
的な少女、ベルが立っていた。

「ああ、ベル、ようこそいらつしゃいました」

「本を返しに来たの。いいかしら？」

「ええ……」

返事をして、シエイズはちらりとフェイリアがいた場所を見た。

しかし、そこにはもう誰もいなかった。

フェイリアは、シエイズ以外の人の前には、あまり現れようとはしなかった。

「どうかした？」

シエイズの様子に、ベルが聞くが、シエイズはすぐに笑顔になり、首を横に振った。

「いいえ。承りました。ありがとうございます。勉強のお役に立ちましたでしょうか？」

「ええ。私の今までの日本という国のイメージを見事に覆してくれました。おもしろかったです」

「もうすぐ留学なされるのですよね」

「そうなの。帰ってきたら、報告に来るわね」

「楽しみにしていますよ」

「じゃあね」

そう言うと、ベルは立ち去っていった。

シエイズは、返却の手続きをし、返却図書のコナーに本を置いた。

フェイリアは、ベルが立ち去っても姿を見せなかったが、たぶん図書館にはいる。

彼女のいる気配は、何となく感じられた。

シエイズは、フェイリアに自分に近いものを感じていた。

何か根拠があるわけではないのだが、自分は昔、何か今とは違うものであったのではないか、という漠然とした思いがあった。

人よりも敏感に、見えないものに反応もした。

むしろ、人には見えないものがたまに見えた。

あまりにも鮮明に見えるので、それが人に見えていないのかどうなのかさえ怪しくなる時がある。

それもあって、フェイリアも、人には見えているのかわからない。それは、彼女がすぐに隠れてしまうこともあったのだが。

だから、この図書館には、たまに見えないものが本を借りに来ることもあった。

「こんにちは」

気づくと、カウンターの前には少女がいた。

いや、少女とも婦人とも言いがたい体つきをしていたので、判断はつけづらかった。

顔は少女のように柔らかだが、身体はバランスよく整っていた。

そのやわらかな曲線を描いたドレスと、まとめあげられた細かい髪が印象的だった。

「はい。いらつしやいませ」

「探して欲しい、ものがあるのです」

シエイズはそこで違和感に気づいた。

彼女の目には、光がなかった。ガラス玉のような妙につやつやした光。

彼女は、人間ではない。

「ええ、何なりとお申し付けくださいませ」

シエイズは、表情は笑顔のままだったが、そのまとう空気は、急に引き締まった。

不滅の恋人 <1>

「どのようなものをお探しで？」

シエイズがカウンターに位置し、女性と向かい合う形になった。

そして、笑顔で対応する。

「1726年から1741年に作曲された楽譜を見せてもらえますか？」

女性は真剣であったが、シエイズは戸惑った。

「……えーと、かなりの量になりますか……？」

「構いません。ここに通わせていただくことになると思いますが、そのお許しがもらえれば」

「え、ええ。こちらは公共の施設ですので、他のお客様にご迷惑がかからなければ結構ですよ」

「では、ご案内いただけますか？」

女性が小首をかしげて聞くと、シエイズはカウンターの下からペーンと紙を取り出した。

「それでは、恐れ入りますが、こちらにお名前などのご記入をお願いできますか？」

それを女性の前にすつと差し出す。

「はい」

女性はペンを受け取ると、サラサラと書いた。

「シャルロツテ、さん、ですね」

「ええ」

「素敵なお名前です」

「……ありがとうございます」

シエイズの言葉に、シャルロツテの表情がやや曇ったのが、気になった。

「こちらが楽譜の書庫になります。一般閲覧ができる部屋ではありませんので、お済みになられましたら、お手数ですが、この入り口横の用紙にご覧になられたものをご記入して、カウンターに提出くださいますようお願いいたしますね」

「わかりました」

シャルロツテは軽く会釈すると、書庫の中へ入ろうとした。

「あ」

しかし、シエイズが思い出したように声をあげたので、シャルロツテは止まった。

「ピアノもありますので、もしお弾きになりたい時はお声をかけてくださいね」

シャルロツテの顔が、一瞬輝いたように見えた。

「ありがとうございます」

そしてまた会釈をして、書庫の中に入っていった。

シエイズはいるか？」

何もない空間から、突然穴が開き、男性が現れた。

角のはえたかぶりものが印象的だった。

カウンターにいたフェイリアは、その人物を睨みつけた。

男性はその様子に、ため息を吐いた。

「そんなに睨まないでくれ。貴方が私を嫌うのは勝手だが、私も好きでこの状況になっているのではないのだから。私のせいではないよ」

「あれ、ガナードさん」

ガナードと呼ばれた男性が困ったようにフェイリアに話しかけていると、カウンターの後ろからシエイズが出てきた。

ガナードは、ほっとした表情を浮かべた。

「ああ、ちょうどよかった、シエイズ。今日もピアノを貸してくれないか？」

シェイズは、またか、というように苦笑いを浮かべた。

「いいですけど、ずっと独り占めをしてはいけませんよ。今日は使う人がいるかもしれないのですから」

「ん？ そうなのか。では、気をつけて使うことにしよう」

「あと、一応防音ではありませんけれど、ガナードさんは結構激しく弾かれていらっしやるようで、音が漏れていますので、注意してくださいね。まあ、まだBGM程度に聞き流せる程度ではありませんけれど」

「あ、ああ。わかった。すまない」

シェイズの次々と突き刺さる言葉に、ガナードはだんだん逃げたい心境に駆られたが、そこで言葉が終わったので、そそくさと演奏ルームへと姿を消した。

フェイリアは、その姿をじっとりと睨んでいた。

シェイズは、フェイリアの頭を優しく撫でた。

「フェイリア、彼は今のところ無害なのだから、そんなに緊張することはいいですよ。あなたは真面目すぎます。あなただって、彼と同じような立場のはずでしょう？」

笑顔で言われたシェイズの言葉に、フェイリアは気まずそうに口を結んだ。

シャルロツテが書庫に入ってから、二時間過ぎた頃、気になる楽譜がいくつか出てきたので、ピアノをそろそろ弾いてみたい、という思いが出てきた。

シャルロツテはスコアの束をいくつか抱えて、書庫から出た。

用紙に見た楽譜を書き付けて、カウンターに行った。

そこには、ちゃんと黒髪の青年がいた。

「すみません。ピアノを使わせてください」

シャルロツテが用紙を出した時、シェイズは少し苦笑いを浮かべた。

「……はい、わかりました。しかし、ただ今使用なさっている方がいますので、ただ今声をかけてきますね」

「あ、私も一緒に行きます」

シェイズがカウンターの椅子から立つと、シャルロッテもそれについていった。

「こちらが演奏室になります。少々、お待ちくださいね」

そう言って、シェイズが部屋のドアを開けると、少しピアノの音が漏れた。

そして、その音を聞いた瞬間、シャルロッテは抱えていた楽譜を落としてしまった。

しかし、その楽譜には目もくれず、シェイズの入っていった部屋へと慌てて入った。

演奏室にいたガナードに声をかけていたシェイズは、少し驚いてシャルロッテを見ていたが、さらに驚いていたのは、ピアノの前にいたガナードだった。

「先生……！」

「……シャルロッテ……？」

互いに、驚いてその場に固まってしまった。

ガナードとシャルロッテは、互いに顔を見詰めたまま数分が過ぎた。

「お知り合いの方でしたら、このままお二人で部屋を使われますか？」

シェイズの声に、ガナードとシャルロッテは我にかえり、彼を同時に見た。

「私はこれで失礼いたします。どうぞごゆっくり」

シエイズは柔らかな微笑みを崩さず、静かな動作で部屋の扉を閉めて去った。

閉ざされた空間の中には、彼の去ったドアを見つめるガナードとシャルロッテが残された。

シャルロッテは、静かにガナードの方へ振り返った。

鋭い輝きを持った目で、ガナードを見つめる。

ガナードは、一瞬視線をそらしそうになったが、黙ってシャルロッテの視線を受け止めた。

シャルロッテは、ゆったりとした歩みで静かにガナードへ歩み寄る。視線はガナードへ向けたまま。

ガナードも、シャルロッテの視線を受けたまま、そのままの姿勢でいた。

ガナードと、あと一歩ほどの距離の場所でシャルロッテは立ち止まる。

ガナードを見上げたシャルロッテの視線は、そこで悲しげに沈んだものとなる。

そうして、ピアノから離れたガナードの右手をそつと両手で包んだ。ガナードは、思わず大きく体が震えた。

一瞬、二人の間の時間が止まる。

息をつめて、また沈黙の時間が流れる。

シャルロッテは、ガナードから視線をそらし、顔をうつむかせた。

「私、ずっと先生を探していました」

不滅の恋人 <2>

シャルロッテの声は震えていた。

「……………」

ガナードは、何も言わずうつむくシャルロッテを見ていた。

しばらくの沈黙。

その間二人はずっとそのままでした。

「私……死んだんです」

どのぐらいの時間が過ぎた時か、シャルロッテが小さく口を開く。

ガナードは、やはり黙って聞いていた。

その目は、静かに閉じられていた。

シャルロッテの声だけを感じるように。

「先生が来られなくなったあの次の日に病気にかかりました……………」

どんとんと弱っていく自分の体のこと。

どんなに家族が励ましても、もはや生きる気力は減る一方だったこと。

シャルロッテは、自身の死ぬ瞬間を、変化してゆく気持ちとともに静かに語る。

ガナードは、その間ずっと目を閉じていた。

「でも、どうしても先生にお会いしたくて、会いたくて……………そう願っていたら、気づいたら私はここにいました。気づいたら……………もう血の通った体ではなくなっていました……………」

ガナードの表情に、徐々に変化が出る。
苦しげに、眉根を寄せた。

「驚きましたが、何物にも縛られずに先生を探せるのなら、何でもいいのです。そして……………こうして、先生に会えた……………私……………」

「シャルロッテ」

ガナードはシャルロッテの言葉を強い声で遮った。そして、彼女に握られていた手を振りほどく。

シャルロッテは、目を大きく見開いてガナードを見た。

「私は、君とはもう二度と会うつもりはない」

「え……？」

ガナードの言った言葉を一瞬認識できず、シャルロッテは聞き返した。

だが、その表情は驚愕とかすかな絶望をまとう。

ガナードは、一瞬表情を歪めたように見えた。

しかし、すぐに冷えた表情となる。

「私は、もう君に会うことはできない。だから、もう私を探そうとしないでくれ」

「嫌です！」

ガナードが言い終えるか終わらないかのうちに、シャルロッテは大声をあげた。

ガナードは、驚いて目をみはる。

「私、絶対に嫌です……もう私にはどこにも行く場所がないんです……たとえ先生に嫌がられようとも、もう私にはどこにも行けないんです……だから……絶対に私、先生から離れません……！」

シャルロッテは、今にも泣き出しそうな顔でガナードを見つめ、彼の手を両手で強くつかんだ。

ガナードも、それ以上は何も言わず、そのままだった。

しばらくして、シャルロッテの嗚咽がおさまってくると、ガナードは空いている手で彼女の髪を軽く撫でた。

「……すまなかった。だが、私は君に何もできない。それは、わか

つてくれ」

シャルロツテは、ガナードの落ち着いた声を聞いて、嬉しそうにほほ笑んだ。

ガナードの手を、自分の頬に擦り寄せる。

「はい。先生の側にいいのなら、何でもいいんです」
ガナードは、重い深いため息をついた。

シャルロツテには、用があるからと言って、ガナードは部屋を出た。シャルロツテは、久々に触るピアノを嬉しそうに弾いていた。

跳ねるような音に、その嬉しさが出ている。

部屋から出てすぐ、シェイズとすれ違った。

「すまなかつたな。面倒をかけた」

ガナードは、シェイズに声をかける。

「いえ、今日は演奏室に予約は入っておりませんから大丈夫ですよ。

……それより」

シェイズの笑顔が、少し鋭くなる。

「何か、事情があまりのようですね？」

ガナードは、一瞬シェイズから視線をそらし、何かを考えるように目を閉じる。

そして、すぐに彼に向き直る。

「少し、聞いてくれるか？ 他愛のない昔話だ」

私は昔、人間だった。

その頃、貴族の子息や令嬢にピアノを教えていた。

それで出会ったのが、シャルロツテだった。

いつからこんな気持ちを抱くようになったのかわからない。

もしかしたら、彼女に会ったその瞬間だったのかもしれない。ただ、それに気づいていなかっただけで。

私にとって彼女は、とても可愛らしく、その周りの世界は輝いて見えた。

それぐらい、彼女は愛おしい存在になっていた。

お互いに想い合っていることに気づいていた。

だが、それを口にすることはできなかった。

私と彼女では身分に違いがあった。

だから、このままでもいいと思った。

いつか彼女と離れることになる日が来ても、ただ今この時を平穩に共に過ごすことができれば。

しかし、彼女の方はそう思っていないかった。

ある日、私が彼女の部屋にいつものように訪れた時のことだった。

いつも彼女はピアノの椅子に座って、私を待っている。

同じ光景なのに、得体のしれない違和感を感じて、私は思わず立ち止まった。

彼女は私に気づいて、こちらを見た。

その目に、ただならぬ雰囲気を感じて、入ったドアの所から動けずにいた。

「先生、お話があります」

私は、強張ったシャルロツテの顔を黙って見つめた。

「何だい、話というのは？」

そして、素知らぬふりをして聞き返した。

シャルロツテにそれが通じないことはわかってはいたが、私は貫き通さねばならなかった。

私はただ彼女にピアノを教えるためだけに、この屋敷に通されてい

るのだから。

シャルロツテは、そんな私を鋭く見つめていた。

怒りなのか、憎しみなのか。何にしても、私は甘んじてそれを受け入れようと思っていた。

今も、そう思っている。

「先生は、私の気持ちをご存じないはずはないでしょう……?!」

シャルロツテの悲痛な声は、私の胸を締め付けた。

だが、私はそれに顔色を変えることはできない。

「……シャルロツテ……前にも言ったが、私は君のその気持ちに伝えることはできないんだ」

視線をそらしたくてしようがなかったが、私はシャルロツテをまっすぐ見つめた。

「わかってくれ、シャルロツテ」

「わかるうとしました……でも、もう私はあなたがいないと辛いんです……! あなたが私の側にいないことを想像するだけで胸がはりさけそうなんです……!」

「……私は、来週からこのピアノの講師をやめる。ここにはもう来ない。そうすれば、君も私を忘れていくだろう」

「先生は何もわかっていらっしやらない! もう私はあなたを忘れられないんです! あなたがいなくなってしまうたら、私、もう生きていけません……!」

シャルロツテはついにその場に泣き崩れてしまった。

しかし、私は何もできなかった。

私は、ただ黙って屋敷から去ることしかできなかった。

そうして、私は二度とシャルロツテの前に姿を現すことはなかった。しかし、私はそれが間違いだったことをその後思い知ることになるんだ。

シャルロツテがどうしているのか、気にならなかった訳がない。

だが、しばらくは距離を置くべきだと思ったから、あえて連絡も一切断った。
もう、会うつもりもなかったが。
その私が、シャルロッテと再び出会うことになるのは、何とも皮肉な巡り合わせだった。

「シエイズ」

「はい？」

ふと、ガナードの声音が変わったので、シエイズは態勢を少し変えて、ガナードを見た。

「セルケ、という名前を聞いたことがあるか？」

「……………まあ……………」

シエイズは歯切れが悪い返事をした。

「セルケが、どうかしたの？」

頭上から少女の音が突然降ってきた。

二人は驚いて上を見ると、険しい顔をしたフェアリアがいた。

「あなた方は、何か、知っているのか？」

ガナードは、二人の顔を不審げに見た。

「……………それを判断するために、ガナードさんの話の続きを聞かせていただけませんか？」

シエイズとフェアリアは、一瞬意味ありげに合わせた。

そして、数拍置いて、シエイズがそう切り出した。

ガナードは、少し不安そうな表情と声音で、また語りだした。

不滅の恋人 < 3 >

シャルロットの講師をやめた後の私の生活はひどかった。

私の心には、どこかでシャルロットが残っていて、全くうまくいかなかった。

生活も荒み、私は病気をこじらせてしまった。

その結果が、今の状態である。

もう、私は人間ではないのです。

そのきつかけになったのが、セルケという男だった。

いや、男なのか、人間かすらわからない。

人のような姿をしているが、仮面をつけているし、現れ方も神出鬼没で、いまいち存在感がない。

私が冷たい眠りについた日、私は暗い空間で目覚めた。

あれがどういふ世界なのか私にはわからないが、生きているものと、そうではないものを隔てる世界だというのはわかった。

実際、私はそこにいて、その世界からこちらにたまに來たりしているからな。

そこでただ呆然と立ち尽くしていた私に、ヤツは声をかけてきた。

「あなた、生まれ変わりたいとは、思いませんか？」

考える力もなかったその時の俺は、ただ流れに任せた。

そうなりたいたとも、それさえも考えていなかった。

こうして、この世界にも來れるようになったのは、ヤツのおかげでもある。

だが、ヤツがどういふ方法でそれをできるようにしたのかはわからない。

だから、私のこの存在も不安定なんだ。

そこまで言って、ガナードはシェイズとフェイリアへ視線を向けた。二人は、どことなく眉間に力を入れているような、深刻な表情をしていた。

「今までで、何か心当たりは？」

ガナードの言葉に、シェイズとフェイリアは一瞬視線を合わせた。そして、シェイズが口を開いた。

「直接知っているわけではないのですが、セルケという名前をいくつかの文献で見たことがあるんです」

「何……？」

ガナードは、少し身を乗り出す。

シェイズは、軽く首を振って、辺りを確認する。

「ここでは何ですし、別室へ行きましようか」

奥の部屋に入ると、シェイズは部屋の本棚から一冊の本を取り出した。そして、それをガナードの前へ差し出した。

「この本だけではありませんが、セルケと呼ばれる者が、願いを叶えると言ってくる話はいくつかの文献に見られます。そして、その誘いを受けた方々に待つ結末は、幸せなものではありません。あなたも、それを察しているのではないですか？」

「……………」

ガナードは、差し込まれた本をとりあえず受け取るが、少し黙った。フェイリアは、二人の後ろで、じっと黙って様子を見ていた。

「……………」私がああ空間に落ちる時、セルケというヤツは言ったんだ。お前の望みを叶える代わりに、お前の大事なものをもらおう、と言ってきた。俺は、その時は何も考えていなかったから、何でもいいとうなずいてしまったんだ。俺には何もなかったからな。だが、数日してだんだんと落ちついてきて、この世界を探るうちに、こちらの世界との行き来する方法を見つけたんだ」

「ちょっと待つていただいでいいですか」

ガナードの話を遮るように、シェイズは言った。
ガナードは、不審げに眉をひそめた。

「多くの文献に書かれている事例では、セルケという男は、相手に自分の人形になってもらうことを望むそうです。願いを叶えるチャンスを与える代わりに、失敗したら魂を抜かれて人形にされてしまうそうです。だいたいは願いが叶えられずに、人形にされてしまうんです。なぜ彼がそういうことをしているのかは、わかりませんがシェイズもまた、ガナードと同じように眉をひそめて考え込んだ。
「……たぶん、ガナードだけが何かを持っている。そして、シャルロットさんはたぶん人形の条件を差しだされている。もう彼女の体は人間のものではなかった。ガナードとも違う。無機物のものに」
沈黙に、フェイリアが重く呟いた。

ガナードとシェイズは、驚いてフェイリアの方を向いた。

「フェイリア……何か心当たりでもあるのかい？」

シェイズの問いに、フェイリアは長く余った袖を口元に押しつけて、しばらく黙る。

「……ガナード、あなた本当は元からただの人間じゃないでしょう？ それはわかってているはず」

「……………」

ガナードをフェイリアが鋭く見つめる。

ガナードは、気まずそうに視線をそらした。

シェイズもそんなガナードに視線を向けた。

「私の家は、代々魔術を扱う家系だった。だが、魔術が使えることは、この世界で生きるには不利益なことしかなかった。私達は、人の暮らしに溶け込むことで今まで生きてきた」

「その力が何のためにあつたとか、先祖が人ではないものと混じったとか、考えなかったの？ もしくは教えられなかったの？」

フェイリアは、どこか責めるように言う。

フェイリアはあまり激しく言い立てるようなことをしないので、シ

エイズは黙って二人の様子を見ていた。

「人々を正しい道に導く力だ、とは祖母から聞いていた。だが、私達の間でも、この力の意味はだんだんと薄れていったから、よくは知らないんだ。私には、忌むしいものでしかない。それがお前の気に障っていたのなら、すまない……」

「……………」
フェイリアは、口を曲げて、押し黙った。自分でも言いすぎたと思っ
っているのかもしれない。

「……それで、フェイリア、それが今回の件とどう関係するの？」
エイズは、先ほどから聞いたかかったことを聞いた。
フェイリアは、エイズの言葉に促されて、口を開いた。

「ガナードは、狭間を統べる者の力を持っているの」

フェイリアの言葉に、エイズとガナードは、一瞬目を大きく開いて黙る。

どういう意味かを、二人ははかりかねていた。

フェイリアも、その空気を感じ取ったのか、気まずそうに口をつぐんだ。

「フェイリア、どういうことか、話してくれる？」

エイズは、フェイリアを気遣うように、ゆっくりと近づき、優しく静かに話しかけた。

フェイリアは、無言でうなずいた。

「世界には、私達が今いる世界と、こちらの世界にはいない者、主に死者などが生きる影の世界と、その間にある狭間の世界があるの。こちらの世界と影の世界がつながらないように調整するのが、狭間の世界の役目。狭間の世界に住む者は、生きても死んでもいない。曖昧な存在。そして、曖昧な存在を確保するために、強力な力

を持つ。それがあなたの一族なの」

ガナードは、まだ驚いてついていけないようだ。

「私は、そんなことは聞いていなかった……」

「……聞かせたく……なかったのかもしれない……。ただ、もうあなたは逃れることはできない」

「……どうしたら、私はどうしたら、いいんだ……。結局、このことはシャルロッテのこととどう関係するんだ……。ガナードの表情に焦りが出てきている。」

「もうシャルロッテは、影の世界に入る存在となっている。セルケという者が何者かわからないけれど、シャルロッテがただ影の世界で安全に暮らしていけるとは思えない」

「どういう、ことだ……?」

「あのセルケという者も、狭間の世界の住人のような気がする。人の魂を人形にするなんて、生きているものの仕業とは思えない」

「それで、どうしたら、いい?」

ガナードは、だんだんいらついてきているようだった。

フェイリアは、ここで一呼吸置いて、重々しい口調で言った。

「……シャルロッテの安全を確保するには、あなたがシャルロッテを狭間の世界の住人にするしかない」

「どういう、ことだ……?」

フェイリアの重い口調に圧倒されつつも、ガナードは口を開く。

「シャルロッテはもう生きてはいないけど、人形の体でこちらの世界に存在している。そして、セルケの管理下にある。それを開放するには、この世に存在している人形の体を破壊し、あなたの管理下、つまり狭間の世界に所属させれば、少なくとも、セルケは簡単には手出しできなくなるはず」

フェイリアの声は、相変わらず淡々としていたが、その言葉は重かった。

ガナードは、フェイリアのその声に、嫌な予感が胸を埋めていくのを感じた。

「つまり、シャルロッテを殺せ、ということか……？」

「ええ、ここまで言えばわかるでしょうね。ただ、体だけを壊すの。そうすれば、器の中にあるシャルロッテの本体があなたには見えはず。そうしてそれをあなたの世界に連れていけばいい。世界に一步踏み込むだけで、その世界の住人になる」

「……しかし、それはもう戻れないということになるんだな……」

「……今更、どこに帰ろうというの？」

フェイリアの表情が厳しくとがる。

「……………」

ガナードは、一瞬言葉につまった。

「フェイリア、あまりガナードさんをいじめてはいけません。彼も苦しんでいるのですから」

シェイズが穏やかにフェイリアを諫めた。

「……そうね、ごめんなさい」

フェイリアは、表情を元に戻す。

「いや、そうだな。そして、全ては私が招いたことでもある。私が責任を取らなければ。ありがとう、フェイリア」

ガナードはそう言うと、身を翻して、部屋から出て行くところとする。

「ガナード」

それをフェイリアが呼ぶ。

ガナードは足を止めた。

「一人でやろうと思ってはだめ」

「私達も、協力いたしますよ」

ガナードが振り返ると、優しく微笑むフェイリアとシェイズがいた。ガナードも、思わず口元が緩んだ。

「ありがとう……」

そうして、彼はまた歩みだし、部屋から出て行った。

不滅の恋人 < 4 >

部屋から出て数歩歩いたところで、ガナードは立ち止まり、ため息をついた。

二人は協力すると言ったが、頼めることなど数えるほどだ。これは、自分でケリをつけなければいけない。

ガナードにはそれがわかっていた。

シャルロッテのいる演奏室に行く足どりは、自然と重くなった。

足だけではなく、全身も重い。

頑丈な鎧を着ているようだ。

重くて動き鈍った手は、それでもドアをつかんだ。

ゆっくりと、ドアを開ける。

関節がぎしっときしんだようだ。

ガナードの気配を察してか、軽快に奏でられていたピアノの音が止まった。

ガナードが室内に入ると、自然と二人の視線が合わさる。

シャルロッテは、嬉しそうに微笑んでいた。

ガナードは、思わず視線をそらす。

シャルロッテは、それを見て、悲しそうに顔を歪めた。

「私、前よりも上手に弾けるようになったでしょうか？」

「…………… そうだな」

シャルロッテの静かな問いかけに、ガナードは少しの間を置いて答えた。

そして、扉の横にあった椅子を持って、ピアノの横に座る。

「楽しそうにピアノを弾くように、なったな……………」

「先生のおかげです」

「……あの頃は、そういう風には見えなかったが？」

「あれから、先生のことを考えてピアノを練習したのですよ」

「そうか……」

「……先生、私に何か言いたいことがありますね？」

シャルロツテの声が低く重く響いた。

「……………」

「先生はいつも、私に何か辛いことを言おうとする時、優しくしてくださいます。あの時も、そうでした……」

「……………シャルロツテ……」

ガナードははつきりとした声で、シャルロツテの名を呼んだ。

シャルロツテは、その声に体を固まらせた。

そして、ガナードを見つめる瞳に力をこめた。

「私が今ここでお前を殺すと言ったら、お前はどつする？」

「……………え……………」

予想通り、シャルロツテは一瞬驚き、次に戸惑った表情になった。

ガナードは、何とか笑顔を取り繕う。

「……………いや、特に深い意味はない。変なことを言っすまないな。

忘れてくれ。今日は演奏室は一日空いているそうだから、楽しんでいくといい」

そう言っつて立ち去ろうとするガナードの手を、シャルロツテはつかんだ。

「先生は、何でもないことをそういう風に言う人ではありません」
二人の動作が止まる。

「そして、きつと先生は私のために、そう言っつてくださっているに
違いありません」

「……………」

ガナードはシャルロツテに向き直り、少しの間彼女を見つめた。

そして、その肩に手を置いた。

「いいや、私は利己的な人間だよ。全ては私の都合なんだよ」

「先生が望むことは、私も望むことです」

シャルロツテは、一度決めると、その意志は固い。

ガナードも、これにはいつもかなわなかった。

「お前を人形にした男から、お前を解放するには、お前を私の世界の管理下に置く必要があるんだ」

「そうしたら、私は先生とずっと一緒にいられるということですね？」

シャルロツテは、どことなく嬉しそうだ。

暗い面持ちのガナードとは対照的である。

だが、ガナードはシャルロツテのその反応に少し救われていた。

「そして、わかっているとは思いますが、私はもうこの世に生きているものではない。別世界の管理者となっている。だから、お前は这个世界で死ななければならぬ。そうしないと、私の世界へ来ることはできない」

「だから、先生は私を殺す、とおっしゃったのですか？」

「ああ。わかってくれたか」

「ええ……でも、先生のお手をわずらわすのは……」

「お前自身が、自分を殺すことなどできないだろう。何より、私がそんなことをさせたくはない。悪いが、すぐに済ませるから、私に任せてほしい。お前が、私のことを信じて、一緒にいたいと思っいてくれるのなら」

ガナードの言葉を聞いて、シャルロツテはますます顔を輝かせた。

「はい……!!」

彼女のこういう所を、自分は愛しく思っていたんだ、とガナードは再確認する。

「それは、ちょっと待っていただけませんか？」

突然頭上から声が聞こえ、ガナードとシャルロツテは驚いて、声の

した方を向いた。

不滅の恋人 < 5 >

頭上に目を向けると、黒い服に身を包んだ仮面の男がいた。

ガナードは、その気配ですぐに察した。

その場の空気が、一瞬にして変わった。

「…………お前が、セルケ、か…………」

宙に浮いている男は、体を揺らして面白そうに小さく声をたてて笑う。

そして、ゆつくりとガナード達の前に降りてきた。

ガナードは無意識にシャルロットを自分の背中にかばっていた。

「そう呼ばれてはいますね。あなた方のことは見ていましたよ。とても興味深く…………」

ガナードは、セルケの仮面の奥に鋭い光を感じた。

「…………もう、シャルロットはお前のもとに戻らないぞ」

ガナードは、セルケを睨みつけて言った。

セルケは、その言葉を聞いて、あごに手をあて、首をかしげた。

その仕草に余裕を感じ、ガナードは少しいらだった。

しかし、セルケの次の言動を黙って見守る。

「私も、せつかく手をかけた人形がみすみす取られてしまうのは非常に残念です」

セルケはここで一呼吸を置く。

ガナードは息をつめた。

「ですが、あなた方のことを見させてもらつのも悪くはないでしょう。……………そうですね」

セルケが一人でそうつぶやきながら、いきなり目の前から消えた。

そして、次の瞬間にはシャルロットの背後に立っていた。

気づいて振り向いた時には、ガナードは自分の目を信じたくなかった。

目の前のシャルロツテの腹部が、赤くそまっていた。

「シャルロツテ……！」

ガナードは、思わず息を飲んだ。

一瞬動けず、その場に固まってしまふ。

ガナードの動きが遅れたその瞬間に、シャルロツテは前へ倒れ込む。倒れ込んだ拍子に、無機質な物体がぶつかりあう音がした。

ガナードは、その場所から動くことができなかった。

目を見開いたまま、体全体が何かに押さえつけられているかのように、そこから動けず、また目を離せずにした。

目に映るのは、バラバラになった、先ほどまでシャルロツテとして動いていたモノ。

「あなたでは手をくだしづらかったでしょうから、私が代わりにしておきました。これであなたと彼女は一緒にいることができます。その形が、あなた方にとって、よいことか、私にはわかりませんがね」

セルケは喉の奥で出しているような笑い声を残し、その場から霞のようにかき消えた。

ガナードは、そこで我に返り、セルケにとびかかろうとしたが、とびかかる直前にセルケは消えてしまい、ガナードは宙をつかむだけだった。

ガナードは、奥歯を音がするほど噛みしめ、こぶしを握り締めた。しかし、すぐにバラバラになったシャルロツテの身体に近づいた。部品を一つ一つ寄せて、抱えあげた。

「シャルロツテ……」

ガナードは、抱えあげた部品を抱きしめ、顔をうずめた。

「先生……」

どこかから、今最も聴きたい声が聞こえてきた。
ガナードは、それが聞こえてくる場所を知っている。

ガナードが降り立った場所は、暗く何も見えない空間だった。
知らない者なら、降り立つことさえできない。

足をつく場所があるのかすらわからない恐怖の暗闇。
しかし、ガナードにとっては勝手知ったる我が家。
何も恐怖ではなかった。

「シャルロツテ」

しかし、目に映るのは暗闇でしかない。

ガナードは名前を呼びながら、辺りを見回す。
シャルロツテの見知った気配を探そうとする。

「先生……」

突然、後ろから柔らかい感触がガナードを包んだ。
ガナードは、見なくてもわかった。
後ろから回された手をそつとつかむ。

細くてやわらかな手だった。
だが、それにもう温度は感じることはできない。
自分と同じ、冷えきった手だった。

「シャルロツテ……」

ガナードは彼女の名前を呼ぶことしかできなかった。
シャルロツテも、そのままガナードを抱きしめたまま。

「先生…… やつと、ずっと一緒にいられます……」
シャルロツテの声も、闇の中に消えた。

辺りは、ただ何もない、先の見えない黒い闇だけが広がっていた。

【「不滅の恋人」番外編】愛を語るには向かない

「先生。ドイツ語は愛を語るには向かないそうです」
ガナードがふと呟くように口にした。

「まあ、確かにそうだろうな」
ガナードも、何でもないように返した。

「だから先生。あまり多くの方に愛の言葉は言わない方がよろしい
と思いますよ」

「何が言いたいんだい？ シャルロッテ」
ガナードは、怪訝そうにシャルロッテを見た。

シャルロッテは、シャルロッテには視線を合わせず、淡々と言う。

「女性の方にいちいちお声をかけられても無意味でございます。怖
いだけです」

「……そうかい。それで、私はどうしたら、いいのかな？」
シャルロッテの言いたいことがわかり、ガナードは思わず嬉しそ
うに笑んだ。

だが、あえて聞いた。
シャルロッテは、少し顔を赤くして、それでもガナードを見ずに
言った。

「私一人に、そのお言葉をくだされば、十分かと存じます」

大事なものは目に見えない - 序1 -

海が見える崖の上。

一人の少女が、崖の先に立てられた十字架の前で、手を組んで祈っていた。

「ベル」

ベルの側に、十二、三歳ぐらいの少年が現れた。

「……我なる主、私にお声をかけてくださいますか」

「あー、俺そういうの苦手だからフツーにして」

神と呼ばれた少年は、苦笑いを浮かべて、手をひらひらとさせた。

「あら、ごめんなさい、つい」

「別にいいんだけどよ」

そうして、しばらく二人でそこに立っていた。

「なあ、ベル、悲しいか？」

「悲しくないわけがないわ。でも不思議なの。今はとても気分が落ち着いているわ」

「Kはああいう仕事だ。きっと、お前には覚悟があっただ、こうなるな」

ベルには、KKという想い人がいた。

しかし彼は清掃員という仕事を持ちながら、その裏では主に暗殺までも行うなんでも屋をしていた。

そのために、ベルの気持ちは受けることができないとわれ続け
ていたのだ。

その彼も、仕事でつい先日亡くなってしまった。

彼の墓が、目の前の十字架である。

「そうなのかしら。でもね……しばらくは、この胸に穴が開いたよ

うな感覚は抜けそうにないわ……」

ベルの声は沈み、視線が下がった。

「ベル」

少年は彼女と並ぶようにベルの横にしゃがみ、肩に手を回した。

ベルは驚いて、その場に固まった。

少年はベルの肩に回した手を、ベルの頭に置き、彼女の頭を自分に近付けた。

「目をつぶれ。よく、聞いてろ」

ベルは言われたとおりに目をつぶった。

「……いや、やめて！」

少したつと、ベルは大声をあげて少年から離れようとした。

だが、彼は離そうとせず、腕に力をこめた。

少年の姿には不似合いなほどに。

「聞きたくない！ こんな音は聞きたくないの！」

ベルの叫び声は切るような悲しい響きになっていた。

「よく聞け！」

少年も大声をあげた。

ベルはその声で一旦は動かなくなった。

少年は優しく彼女の髪を撫でた。

「いいか、よおーく、聞くんだ」

少年は言い聞かせるように、重く優しい声で言った。

ベルは再び目を閉じた。

そしてしばらくすると、彼女の目から涙が出てきた。

だが、その顔は穏やかだった。

「……聞こえたわ」

「そうか、それはよかった」

少年は、今日はいいい天気ね、と言われたような気軽さで返した。だがそれには、親が子に言うような、穏やかな響きがあった。

「どんな人でも、最後は優しい音色になるのね」

「そう聞こえたなら、そうなんだろう」

少年は音楽によって世界を統べる神。

ベルに悲しさを受け入れさせよう、彼は音を聞かせた。

だがその音は、ベル本人しかわからない。

少し二人は黙った。

まだ聞こえる音を、じっくりと体に染み渡らせるように。

強い風が二人の周りを包んでいた。

やがて、少年は優しくベルの頭を二、三回叩くと、立ち上がった。ベルが少年を見上げようとすると、頭に何か固くて重い物に乗せられた。

「お前が好きな本だ。これにも、いいこと書いてあるよな」

ベルが頭の上にあった本を手に取り、そのタイトルを見ると、そこには『星の王子様』とあった。

それはどこかで見たとのことのあるような装丁だった。

ベルはそれを見て、ふと表情を和らげた。

「……ありがとう」

ベルは穏やかな息をはきだしながら言った。

少年も、穏やかな笑みを浮かべてベルを見ていた。

ベルが去った後。少年は一人崖に立つ。

「つたく、本当に早くいなくなりやがって……バカだよ、お前は」その声は皮肉な響きを持っていたが、どこか悲しげでもあった。そしてどこからともなく四角張った瓶を取り出し、その蓋を開け、それを口にくわえて飲み始めた。

三分の一ぐらいを一気に飲むと、瓶を口から離れた。

いつのまにか、彼の姿は二十代ぐらいになっていた。

「お前の好きな酒だ。地獄で飲んでろ」

そう言うと、今度は瓶の口を真下の海に向けた。

中の透明な液がどンドン瓶から落ち、浴びた光を反射しながら空中を流れ、黒とも思えるような濃い青の海に消えていった。

「お前は絶対、天国に迎えてなんかやらないからな」

瓶の中身がなくなると、少年はそう言って、きびすを返し、その場からかき消えた。

RAN

2007/10/14

大事なものは目に見えない - 序2 -

「おう、どうしたんだよ。やられたのか？」

Kが路地の裏の壁によりかかって、座り込んでいるところに、十二、三歳ぐらいの少年が声をかけた。

Kは、少年を見上げて、自嘲気味な笑みを浮かべた。

少年は、軽く笑っていた顔を、少し引き締めた。

「何だよ。別にケガは大したことないんだろ？ 何て顔してんだよ」

少年は、困ったような笑顔を浮かべていた。

「……………なあ……………」

少年に、KKはうつむいたまま、言った。

「俺は、あいつの近くにいても、いいんだろうか」

少年は、少し黙った。

Kの言うあいつとは、ベルのことだ。

彼女の飼っている猫を探す依頼を受けてから、彼女とよく会うようになった。話すようになった。

しかし、彼女は、Kの裏の仕事を知らない。

普段は掃除夫だと思っているし、猫探しに関しては、小遣い稼ぎだと思っているだろう。

しかし、Kの仕事は、自分のみならず、下手をすれば周りをも危険に巻き込む仕事だ。

自分が死んで、彼女が悲しむ、なんていう甘い夢は期待してないが、もし彼女が狙われることになったら、自分は彼女を守りきれ

る自信がない。

自分のことでも手一杯なのだから。

「そう思っただったら、離れた方がいいんじゃないかねえのか」

少年は、淡々と言った。

Kは、無表情でそう言った少年を見上げて、苦笑いを浮かべた。

「……彼女は、俺にとっては、まるで星みたいだ。見えるのに、全然手が届かない。でも、光り輝いていて、どうしても手を伸ばしてみたくなる」

少年は、空ろに呟くKの前にしゃがみこんで、人差し指をKの額にグリグリとついた。

「ったくよー、そう言ったって、未練たらたらなんだろう。だったら、んなこと言っただじゃねえっての。甘えんな」

「……………そうだよ、な……………」

少年の言葉に、Kはふっきれたように笑った。

「ったく、痛いってんだよ。その指どけろ。撃つぞ」

そう言つと、Kは額にあった少年の指をどけた。

「撃てるもんなら、撃ってみろってんだ」

少年は、右手で銃を撃つ真似をした。

「お前には、かなわねえよ、本当。ありがとうな」

Kは先程より少し気の晴れたような笑みを浮かべて言った。

「よせよ、気持ち悪い。とりあえず、お前最近鈍ってたみたいだから。気をつけろって言いたかったんだよ。何せ俺は、美しいお嬢さん方の味方だからな」

「俺の台詞取るんじゃないかねえよ」

気取って言う少年に、Kが立ち上がり、その頭をコンと軽く拳骨で叩いた。

「そうそう、それでいいんだよ。だけど、自分が背が高いからって、
そういうことすんのは気にいらねえな。ぶん殴るぞ」

「おお、恐い神様だな。タタリがないうちに、とっととずらかるか
ね」

そうKは言つと、路地裏の奥に消えていった。

少年は、彼が見えなくなるまで、その様子を見ていた。

「星みたいだ、か……」

少年は、今、星空の海にいた。

周りはひたすらに先の見えない暗闇。そこに浮かぶ様々な輝きを
放つ星たち。

彼はその星たちを感慨深げに見ていた。

「星を整理する手がおろそかになってるよお」

その少年に、突然かけられる声。

驚いて声のした方を振り返ると、うさぎ耳の少女と、猫耳の少女
が笑顔でいた。

少年は、一瞬呆けた顔をしていたが、すぐに口元を釣り上げて、
笑みを浮かべた。

「そうだな。ちゃんと集中しないと。サンキュ」

「この星には、願いと魂が宿ってるのだから、きちんと流してあげ
ないといけないのでしょ」

うさぎ耳の少女が、腰に手をあてて、しょうがないなあと言う調
子で言った。

「ああ、全ての願いは星となり、地球を見守っている」

「そう。これには、みんなの、大切な願いが、入ってるんだから」

少年は、一つの星に口付けをした。

そして、またそれを星の海の中に戻す。

流れてゆくもの、上るもの、星はそれぞれの動きをする。
流れたものは、また別の世界へと移動する。

「こうして、人々の願いは巡っていくんだ。きれいだよな」
少年は、誰にともなく、そう呟いた。

RAN ***2007/10/14***

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2450t/>

図書館の人

2011年8月20日15時18分発行